



2013年(平成25年) 4月24日 水曜日

Weather forecast table for Tokyo and other regions.

朝日新聞東京本社 本日の編集長=平山長雄

apital 朝日新聞の医療サイト

ピニオン社説 16.17面

発事故 中間貯蔵、不安残し調査

福島第一原発事故で汚染された土を、ひとま保管する中間貯蔵施設。その建設地を選ぶ環...

政策 成長戦略「第3の矢」どこへ

政府の成長戦略を話し合う会議にまとまりがない。産業競争力会議では規制緩和を進めよう...

円安 100円目前の足踏みなせ

円相場が、2009年4月以来4年ぶりの円安水である「1%＝100円」を前に足踏みしてい...

社会 六本木ヒルズ開業10年

六本木ヒルズが26日で開業10年を迎える。都にできた職住近接の新しい街は、年間4千万が訪れる一大名所になった。「ヒルズ族」と...

SANYOブランド消滅 11面

刊高校野球 都立高の挑戦 19面

ット選挙、都議選が実験場に 38面

Table with TV and radio program listings.

デジタル版 巨大生け花がお目見え

朝日新聞 DIGITAL logo and website information.

いもん! ドラえもん 1165 しんぶん編

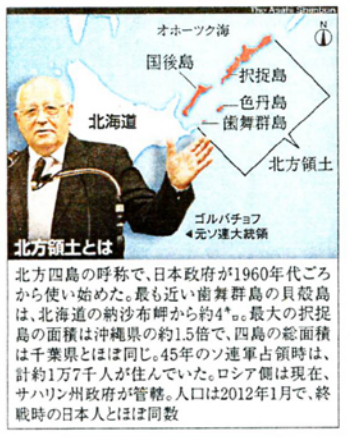
# 「歯舞と色丹 返還義務」

## ゴルバチョフ政権内部文書

### ロシア政府主張と矛盾

旧ソ連のゴルバチョフ大統領(当時)が1991年4月の日本訪問前に、政権内部で北方領土四島の法的地位についてひそかに検討させていたことが分かった。朝日新聞が入手した文書によると、①56年の日ソ共同宣言でソ連は日本に歯舞、色丹両島を引き渡す義務を負った②紛争は国際司法裁判所(ICJ)の審査対象になりうる③といった内容になっている。

ロシア政府の「第2次世界大戦の結果、四島の領有権はロシアに移った」との主張とは矛盾している。ゴルバチョフ氏は、科学アカデミー「国家と法研究所」を中心とする作業グループに、客観的な分析を指示。国際法や日本研究の専門家約10人が参加した。文書では、51年のサンフランシスコ講和条約について、平和条約締結後に日本に引き渡す義務を負った」と明快な立場を取っている。検討の指導的役割を担っ



北方領土とは 北方四島の呼称で、日本政府が1960年代ごろから使い始めた。最も近い歯舞群島の貝殻島は、北海道の納沙布岬から約4°。最大の択捉島の面積は沖縄県の約1.5倍で、四島の総面積は千葉県とほぼ同じ。45年のソ連軍占領時は、計約1万7千人が住んでいた。ロシア側は現在、サハリン州政府が管轄。人口は2012年1月で、終戦時の日本人とはほぼ同数



尖閣 侵入12時間 果、尖閣諸島周辺の領海に中国の海監18隻が侵入、約12時間にわたり、午後7時半ごろまでに領海

たレイン・ミュレルソン元エストニア第1外務次官(69)によると、四島の問題がICJに付託されたケースも想定して分析された。「色丹、歯舞は日本に属する立場だ。択捉、歯舞でソ連の立場は十分強いの、絶対的ではないが、ソ連のものという結論には至らなかった」と明かす。文書はゴルバチョフ氏に提出されたほか、5部程度しか作成されず、ソ連崩壊による混乱でその存在が表面化することはなかった。ミュレルソン氏が3年前ほど前、国家と法研究所の元所員が保管してきたものを見つけた。ミュレルソン氏は「現在のロシア指導部も文書の内容を把握しているはずだ」と語る。

新思考外交を反映 ゴルバチョフ政権が四島の法的地位を検討したのは、ペレストロイカ(改革)と国際協定に基づく新思考外交が推進された時代が色濃く反映している。ソ連とロシアは、フルシチョフ第1書記が1956年の日ソ共同宣言で歯舞、色丹の二島引き渡しを約束してから、現在のプーチン大統領まで、日本との関係改善をはかるたびこの二島引き渡しをちらつかせてきた。検討文書が示すように、歯舞、色丹に対する日本の領有根拠が極めて強いことが、その背景にある。昨年3月にプーチン氏は朝日新聞などの会見で、四島の総面積の7%にすぎない歯舞、色丹の二島引き渡しでは折り合えない日本の世論の表情を踏まえたうえで「引き分け」による解決を目指す考えを示した。これまで日本政府は将来につながる対応ができなかった。今後の交渉では「法的手続きに決着がついていない」と文書がいう。国後、択捉の帰属問題にこれまで踏み込んでくるのが最大の課題になる。(機動特派員 大野正義)

半導体エース復権 東芝サプライズ人事

大戸人語 閣僚の靖国神社参拝が問題なるたびに、いしえの「名決」が思い浮かぶ。実際にあった判決ではない。シェークスピアの劇「ペニスの商人」で下れる。「ペニスの肉を切り取ると、血は一滴も流してはならない」とある。大臣から、私人という「胸の内」を、そうすりやりと切り取れるものだろうか。とりわけ靖国参拝は、心の問ながら、相手のある問題である。自国に何の遺憾があるのか。そう思っても、他国への想像を欠いた考えは、境へ行き着いたとたんに力を失う強者ばかりなるまい。不幸な歴史を背景に、切れば血が出る。中国との問題は態度を硬くした。中韓の両国ともナショナルイズムにも辟易するが、不仲不信が高じるのは芳しくない。北朝鮮独裁者を喜ばせることもなる。6月に内閣前に、「(戦死)やわれ/兵隊の死ぬやあわれ」の詩で知られる戦没竹内浩三のお姉さんに話を聞いた。話「侵略」に及んだときの、静かな言葉今も胸に残る。▼「やはり自分の意思で

朝日新聞 DIGITAL logo and other promotional text.

